

はじめに

近年、世界の情報関連産業の技術革新はめざましく、その影響は単に産業界だけではなく、社会の至る所で見られ、これまでの伝統的な価値観までも根本から変えるほどの力である。その影響の大きさは、かの産業革命に匹敵すると言えるほどである。

この変化の波は教育界でも見られ、新しい状況に対応する動きが急速におこってきている。

昨年12月、内閣総理大臣の下に置かれた「教育改革国民会議」の最終報告が取りまとめられ、新しい日本の教育の方向性が示された。それを受けた形で、文部科学省は教育改革の具体的な施策や課題を取りまとめ、「学校が良くなる、教育が変わる」というスローガンの下、21世紀教育新生プランを発表した。

一方、教育改革の動きは大学改革にも見られ、国立大学の独立行政法人化への急速な動きは、大学はもちろん、各附属学校にもその存在の意味を問うてきている。

このような大きな社会のうねりの中で、本校も新しい教育の姿を求め、ここ数年来、先進的な研究に取り組んできた。平成9年度から4年間文部省の研究開発学校指定を受け、小中連携を中心として、自分にとって「意味ある学び」を創出する教育課程の開発研究に取り組んできた。また、平成8年度から3年間は武道推進の研究指定を受け、さらに平成10年度から3年間、学校の情報化推進のためのネットワーク活用方法研究の指定を受け、「学びのスタイルを変えるネットワーク環境活用の開発」研究を行った。これらの研究については、研究発表会や紀要等でその成果を広く世の中に問いかけてきた。さらに、平成13年度からは、「個の自立を支え、相互啓発を促す」ことをテーマに、学校教育における情報教育や帰国子女教育の在り方や、さらには、総合的な学習と各教科の関連を内容や培いたい技能・能力という観点から研究を進めていく予定である。今後は、開かれた学校や成果の共有という視点からも、一層積極的に情報を発信していくことが、附属学校の使命と考えている。

今回の紀要についても、多くの方々の忌憚のないご批評をいただければと思います。

2001年7月1日

お茶の水女子大学附属中学校校長 小川 昭二郎